

<龍秀美 撰> 2020年6月

時事を文学に表現するのは人間生活のなりゆきとでもいうものかもしれませんが、感性の初めての経験はやはり貴重だと思います。今回は、近景や遠景に新型コロナの影響が現れたものも選んでみました。

みんなヒーロー

家でテレビを見ているだけで

作者 佐分利建夫

——「ヒーロー」の意味を変えてしまった自粛生活。

初夏の電車に

遠い遠い亀の匂い

数秒息をとめて ひゅっと

流れる

作者 郡司和斗

——地球上の生き物としての人間と亀の共通点と遠さ。改めて思うコロナ禍の今。

目玉焼きにはソース

と答えたみなさん

おめでとう 火星移住権です

作者 真島

——ソース派、醤油派、ケチャップ派、人生はそんなところで激変することもある。

錆びた鉈のような幼さ

脳天に振り下ろされ

真剣白刃取り

し損ねて重傷

作者 春町 美月

——「幼さ」は時に悪や罪となる。

防犯カメラ奥に晩夏が映りこむ

作者 細村 星一郎

——目的外のものに現れる逸脱のポエジー。目的とは何か。

罫線。君は空白を以ってして

けれども論います語句を

悟れば梅の実が生って

作者 来栖 優

——口語詩句のひとつの特徴が出た作品。句読点、人称の変化、行替えによるイメージの転換の面白さ。

大抵は

扇風機へと淋しさをぶつけて

首を振っていただく

作者 西春奈

——他愛ない日常が詩によって変形するとき。

面倒臭いよねえ

本当に面倒臭い

いじめられないように

って考える自分

作者 桜咲

——そう考えること自体が面倒なのか、面倒と思う自分が面倒くさいのか。

(OK,Google)

死んでから

天の川まで

どれぐらい

作者 亀山こうき

——最近「OK.Google」を使った作品は多いけれども、スケールが大きい。

眠れぬ夜には文学を  
川端見し間にむら髪覆え  
作者 井脇 浩之

——昭和の文豪達をエイッとばかりにひとまとめ。

リボン  
解けて落ちて信号はまだ青で  
なのに  
もう取りに行かないのね  
わたしは  
作者 春町 美月

——この作者の持ち駒は多いが、ここらあたりが本領かも。

足の形くらべあって  
もう夏なんだね  
作者 合川秋穂

——爽やかな作品。「くらべあう」が新鮮です。

ママ、おんぶして  
って母が泣いて言うから  
私は母をおんぶする  
作者 うすしか

——子ども返りした母を負ぶう優しさと哀しさ。